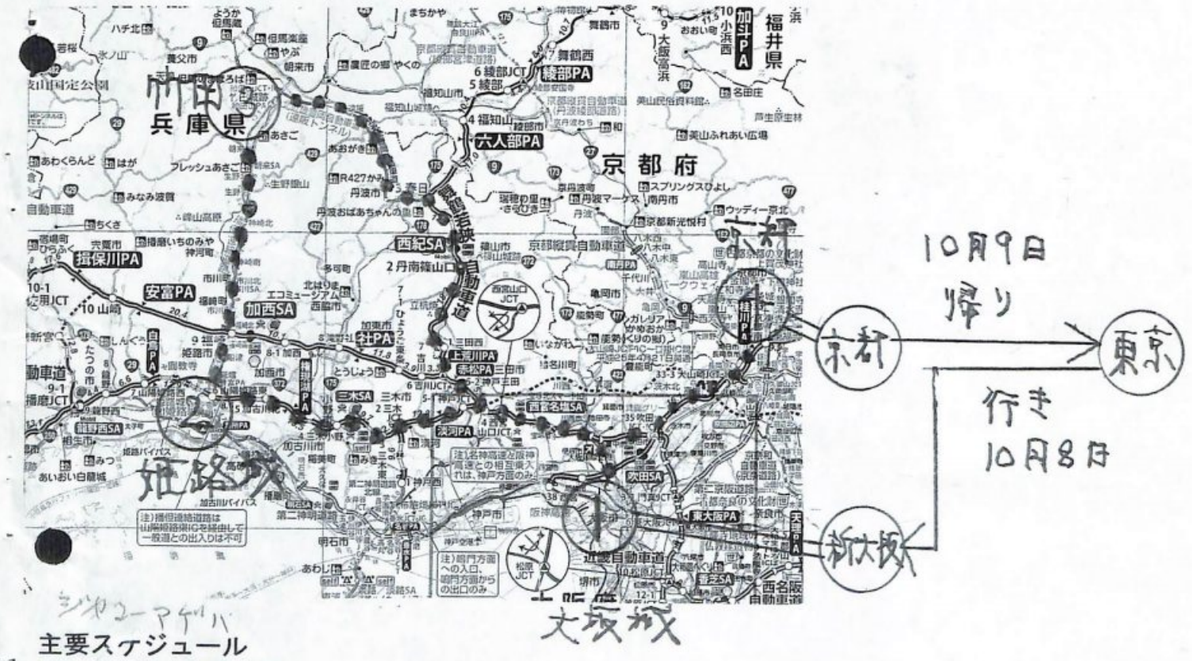
26-ツ10　38-74　26-10-1

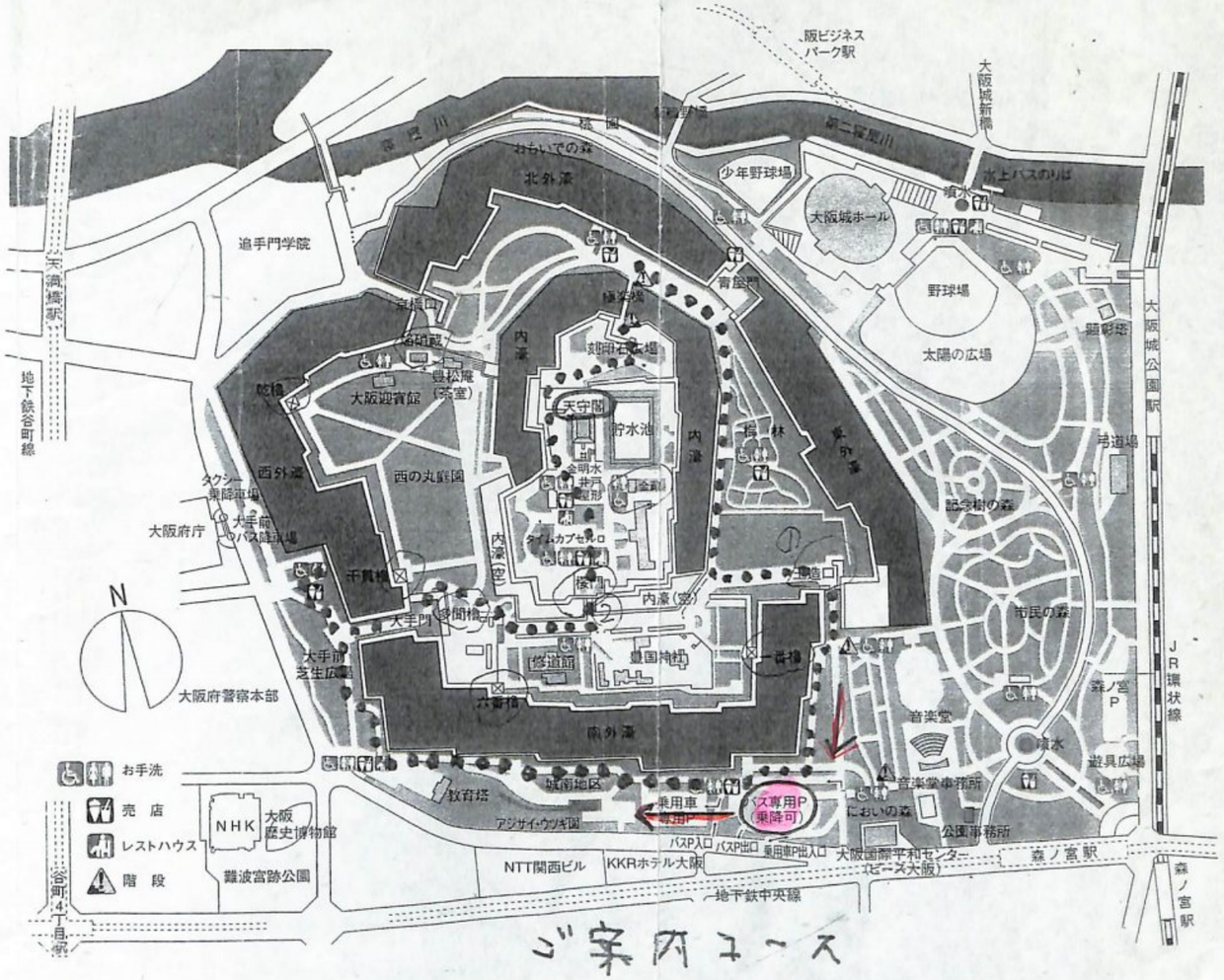
城を歩く会「創立２０周年記念一泊見学会」資料①

# 信長→秀吉、天下統一の「大坂城」と織豊期石垣城の傑作「竹田城」を歩く

平成２６―１０―８、９　　山岸弘明

関係講座＝
２月２０日、春季研修会＝太閤大坂城と徳川大坂城～創立２０周年旅行のみどころ
７月２５日、夏季研修会＝織豊期石垣城の傑作・竹田城～創立２０周年旅行のみどころ




見学３城の現存遺跡時代区分

| | | |
|---|---|---|
| 大坂城 | 中世×、織豊期△、近世◎ | 近世遺跡、地下に織豊期遺跡 |
| 姫路城 | 中世×、織豊期○、近世◎ | 織豊期、近世複合遺跡 |
| 竹田城 | 中世○、織豊期◎ | 中世、織豊期複合遺跡 |

大坂城（大阪城＝明治維新後の呼称）の概要
所在地＝大阪市中央区大阪城公園
別称＝金城、錦城
創建＝天正８年、天正１６年、寛永５年
城主＝織田信長、豊臣秀吉、徳川将軍家
縄張り＝黒田官兵衛、藤堂高虎
形式＝輪郭式平城または平山城
天守構造＝複合式後期望楼型（初代）、独立式層塔型（２代）、独立式望楼型（３代）
遺構＝乾櫓などやぐら４基、大手門、大手門続き多聞やぐら、桜門、御金蔵、焔硝石蔵、金明水井戸屋方（以上国指定重要文化財）、再建天守（登録有形文化財）、大阪城公園（特別史跡）
史蹟＝国指定特別史跡
現状＝昭和６年天守を復興、現在は大阪城公園としてほぼ縄張りの原形をとどめている。また、地下から豊臣時代の石垣も発見された
みどころ＝天守内部の展示史料、現存するやぐら、日本一の高石垣と大手門などの巨石

## 主要スケジュール

**第１日（１０月８日）**

| | |
|---|---|
| ７時０３分 | 東京発「ひかり４６１」（または７時３０分東京発「のぞみ３１１」） |
| | 新大阪１０時０５分着（１０時０９分） |
| | 新大阪駅「新幹線南口」改札口集合（到着ホームの１フロア下、中央部） |
| １０時２０分 | 貸切りバス（エムケイ観光バス）出発 |
| １１時００分～１３時００分 | 大坂城見学 |
| １５時００分～１７時００分 | 姫路城見学 |
| １７時３０分 | 「ホテル姫路プラザ」到着、宴会 |

**第２日（１０月９日）**

| | |
|---|---|
| ８時００分 | ホテル出発 |
| ９時３０分～１１時３０分 | 竹田城見学 |
| １３時４５分～ | 京都市内見学（豊国神社、方広寺など＝変更の可能性あり） |
| １５時００分～１６時００分 | 京都御所見学 |
| １７時３０分 | 京都駅解散 |

# 「夢」結んだ天下人の堅城＊大坂城

**1）始めに天皇稜？あり**

①大坂城を空から見ると仁徳天皇稜、履中天皇稜に連なる巨大前方後円墳にみえるという。南北６００m、東西４００m、日本最大級で天皇稜に相当する。

②石山の地名も前方後円墳が石で覆われていたことに符号する。本願寺が巨大古墳に本山を置いたと考えられる。

**2）石山本願寺の寺内町「大坂之城」**

①大坂城の創始は戦国時代に浄土宗の総本山であった石山本願寺である。天文年間細川晴元と抗争を繰り返し、濠をめぐらし塀を築いたことにはじまる。

②天正年間、「天下布武」を旗印にした織田信長が登場、安土に拠点を移して天下統一を目指すが、究極の覇城として狙いを定めたのが「大坂之城」と呼ばれた石山本願寺であった。

③本願寺は１０年間におよぶ信長の執拗な攻撃に耐えたが、天正８年（１５８０）朝廷の斡旋で開城した。ところが無傷の本願寺引渡しに反対する僧侶らが立て篭り、怒った信長は大伽藍に火を放った。その猛火は三日三晩石山の空を焦がしたという。信長は本願寺の遺構をいっさい消し去った上で新たな大坂城プランを立てる。

**3）信長、大坂城築城を開始するも本能寺に散る**

①信長の大坂城は丹羽長秀の縄張りで始まった。本願寺跡地を整理、大坂湾の淀川河口を湊として取り込む都市計画であったが、天正１０年本能寺に倒れた。

**4）秀吉が完成させた大坂城総構え**

①信長の後継者となった豊臣秀吉が武家政権の府都としての大坂城築城を再開、天正１３年５重８階黒漆下見板と金箔瓦の豪華な望楼型天守を完成させた。同１８年小田原征伐で全国を統一。関白太政大臣、位人臣を極め、野望は大陸出兵へと繋がった。

②文禄３年（１５９４）大名の家族を人質とする大坂屋敷をすっぽり囲む大溝と総構えを築く。以後順次整備を続け、巨大水濠と石垣に囲まれた日本一の堅城が誕生した。

③慶長３年秀吉が死去。№２の家康が次期政権をアピール、同５年関が原の合戦の勝利で徳川政権は現実のものになる。同８年江戸幕府成立、家康は残るライバル豊臣家の根絶を目指す。

④慶長１９年秀吉が創建した京都方広寺の「梵鐘銘いいがかり」から「大坂冬の陣」に、この戦いこそ「難攻不落」を誇ったが、総構えと外堀を埋め立て裸城となった同２０年の「夏の陣」で大砲を打ち込まれ、火炎の中に豊臣家が滅亡した。

**5）豊臣色を一新した家康の大坂城**

①徳川家康は豊臣氏大坂城に変わる新たな大坂築城に着手し、工事は没後、秀忠、家光に引き継がれた。

②完成した大坂城は秀吉の大坂城の縄張りの上に５～７m の盛り土をして痕跡を完全に消し取り、その上に新たに石垣を積み上げた。その石材は瀬戸内海の小豆島などから採取した花崗岩で統一、その高さと規模は類をみない壮大なものとなった。寛永３年５重５階地下１階の白漆喰総塗り込めの徳川大坂城天守が完成した。この天守は寛文５年（１６６５）に焼失、以来大坂城は天守台だけで建物はなかった。

③江戸時代を通じて徳川家の直轄城とされ、譜代大名と旗本が在番した。

④慶応４年（１８６８）鳥羽伏見の戦いに敗れた徳川慶喜が逃げ帰り、退去後の混乱で本丸御殿などを焼失。明治４年以降陸軍駐屯地とされた。

**6）「大坂夏の陣図」イメージした昭和の３代大阪城天守**

①昭和６年、軍隊の駐屯地であった徳川天守台上に太閤天守をイメージした鉄筋コンクリート「昭和天守」を建造。

②第二次世界大戦の空襲も免れた。築５０年ころから老朽化がめだち平成１１年改修、復興当初の姿をよみがえらせた。大阪市のシンボルとして定着している。



# ３度の落城悲劇～南外堀から日本一の大坂城を歩く

**1）新大坂駅集合。観光バス乗車**

①人数確認。最初の見学地・大坂城をめざす。

②大阪城公園バス駐車場で降車。

③現在地は城中３の丸。正面の水濠は南外堀。内側に２の丸と本丸がある。

**2）石垣はより高く、堀はより深く～秀吉を凌駕した日本一の巨城**

①現存の南外堀は元和６年から始まった徳川大坂城再築工事の総仕上げ第３期工事の寛永５年着工、同７年完成。西国、北陸の諸大名を助役とする「天下普請」で、秀忠が「石垣を旧城の２倍、堀の深さも２倍にせよ」と命令したとされる。

②広い堀幅＝７０m。高い石垣＝３０m。外堀全体を統一。
連続する屈曲（折れ）。強烈な横矢掛り。

＊横矢＝敵を側面から攻撃すること。塁線を屈曲させることで横矢を作る

③江戸城は継ぎ足しと自然地形に左右されて堀幅や石垣高さは不ぞろいであるのに対し、大坂城は基本設計に一貫性があり、堅固さと美しさが増幅されている。

④打ち込みハギ、やや急勾配そり、扇の勾配。

⑤３番、４番櫓跡＝外堀の櫓はすべて３重で同形。連続する１～７番櫓と櫓間を結ぶ多聞櫓が２の丸南面を守った。

⑥５番櫓跡＝この部分の石垣は日本最大で高さ３３m ある。

⑦６番櫓（国指定重要文化財）＝寛永５年創建。２重２階。平側（正面）屋根入母屋造り、本瓦葺き、しゃち、軒破風なし、２重千鳥破風、初重出窓石落し。白漆喰総塗りこめ。窓も少なく武者窓、半間戸。すべての櫓が同形、金太郎あめ形。連続させるために１つ１つはシンプルに抑えている。

⑧慶長１９年「大坂冬の陣」は、総構えが取り囲む巨城であった。徳川軍は総構えを突き崩そうとしたが、一兵も城内に入ることはできなかった。冬の陣の和議にあたって豊臣方は総構えの埋め立てを受け入れたが徳川方は総構えのほか２の丸と３の丸の堀も埋め立てた。このことが「難攻不落」大坂城の生命線のとどめをさすことになる。

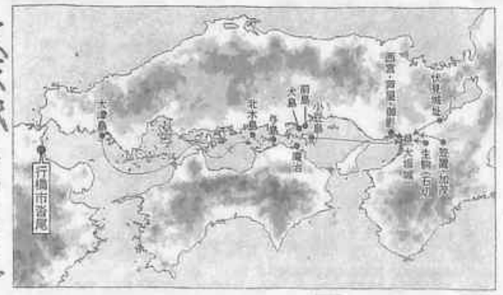
⑨慶長２０年の「大坂夏の陣」は豊臣軍が城外に出て、防戦するが所詮「多勢に無勢」、大坂城が落城、豊臣氏が滅亡する。

←南外濠

←千貫櫓

| 順位 | 石名 | 位置 | 高(最高部)(m) | 横(最長部)(m) | 表面露出実面積(㎡) | 石の推定産地 | 担当大名 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ① | 蛸石 | 桜門枡形 | 5.5 | 11.7 | 59.43 | 備前 犬島 | 岡山 池田忠雄 |
| ② | 肥後石 | 京橋門枡形 | 5.5 | 14.0 | 54.17 | 讃岐 小豆島 | 岡山 池田忠雄 |
| ③ | 振袖石 | 桜門枡形 | 4.2 | 13.5 | 53.85 | 備前 犬島 | 岡山 池田忠雄 |
| ④ | 大手見付石 | 大手門枡形 | 5.1 | 11.0 | 47.98 | 讃岐 小豆島(千家) | 熊本 加藤忠広 |
| ⑤ | 大手二番石 | 大手門枡形 | 5.3 | 8.0 | 37.90 | 讃岐 小豆島(千家) | 熊本 加藤忠広 |
| ⑥ | 碁盤石 | 桜門枡形 | 5.7 | 6.5 | 36.50 | 備中 沖ノ島(北木島)？ | 岡山 池田忠雄 |
| ⑦ | 京橋口二番石 | 京橋門枡形 | 3.8 | 11.5 | 36.00 | 讃岐 小豆島? | 岡山 池田忠雄 |
| ⑧ | 大手三番石 | 大手門枡形 | 4.9 | 7.9 | 35.82 | 讃岐 小豆島 | 熊本 加藤忠広 |
| ⑨ | 桜門四番石 | 桜門枡形 | 6.0 | 5.0 | 26.90 | | 岡山 池田忠雄 |
| ⑩ | 亀石 | 桜門枡形 | 3.4 | 6.9 | 約23.0 | 備前 沖ノ島 | 岡山 池田忠雄 |

大阪城巨石ランキング




石材採石場

### 3）千貫櫓が強烈な横矢～大手門の守り

①大手門前で南外堀と石垣を遠望。連続する屈折折れ、大坂城ベストワンの景観。
②西外堀側に回って、西外堀、大手門と千貫櫓を望む。この角度も最高。
③千貫櫓＝乾櫓とともに大坂城現存最古の建造物。千貫櫓の名前は本願寺時代に遡るとされる。元和６年建造の現存。２重２階、平側は屋根軒唐破風、２重千鳥破風、石落し。
大手門を攻める敵に側面から攻撃するための櫓。千貫櫓の名は石山合戦でこの櫓を攻めあぐねた信長が「落した者に銭千貫文を与える」といったことに由来する。
＊大手門に対する強力な横矢。狙い打ち
④大手門＝３の丸から２の丸への正門。
登り坂、外門（２の門＝薬医門）、石垣枡形、多聞櫓、内門（１の門＝渡櫓門）
＊虎口の登り坂は攻め手にとって辛い。千貫櫓がより防備を強固にしている
＊枡形＝城の出入り口を石垣で方形に囲み、城内に直進できないように門を配置する
＊多聞櫓＝屋根付きの廊下にした塀。狭間や武者窓から鉄砲や弓矢を射掛ける
＊渡櫓門＝虎口の左右に石垣を配し、櫓を渡した２重門。１階が大御門のある通路で２階は射場になる。
＊大手枡形の巨石＝枡形とは城の主要な出入り口に設けられた四角い区画のことで敵の侵入を食い止める役割を果たした。築城技術の進歩にともなって強固な石垣造りのものがあらわれ、大坂城の大手口枡形では城の威容を誇示する巨石が数多く使用されている。大手見付石は、表面積が２９畳で城内第４位、左の大手２番石は２３畳で第５位、右の大手３番石は２２畳で第８位、いずれも採石地は瀬戸内海の小豆島と推定されている。現存する大阪城の遺跡は豊臣時代のものではなく元和６年から１０年にわたった徳川幕府再築工事によるもので、石垣は将軍の命令を受けた諸大名が分担して築いた。この箇所は当初加藤忠広が築き、のちに久留米藩主有馬豊氏が改築した。

大手門 渡櫓門

桜 門

桜門前の空堀

天守を望む

大坂城最大の巨石たる石

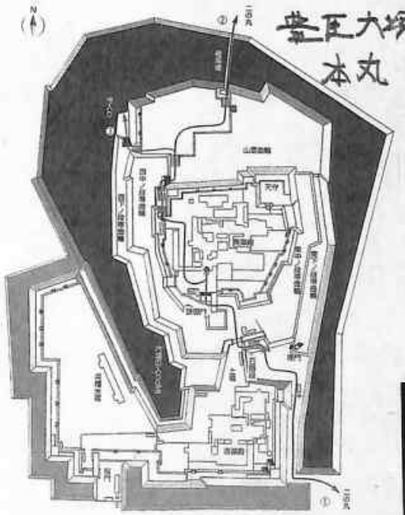


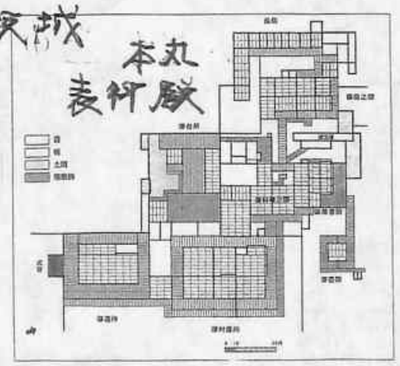
### 4）両側は緑のカラ堀～本丸大手の桜門

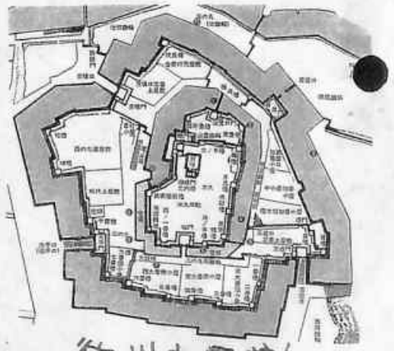
①本丸大手口は空堀になっている。空堀は水を入れない文字通りカラの堀のこと。石垣造りで堀幅が広い空堀は水濠より堅固とされる。堀底は緑一面の平底船形、特別な仕掛けもない。やすらぎの居住性を意識した縄張りデザインが覗える。
②本丸の大手枡形門。登り坂、枡形、外門（薬医門）、石垣枡形、多聞櫓、渡り櫓門
＊桜門虎口の両袖巨石
＊桜門の巨石＝桜門の内側には本丸の正面を守るため、石垣で四角く囲まれた枡形と呼ばれる区画が設けられ、上部に多聞櫓が建てられた。この桝形は徳川幕府による第２期工事が始まった寛永元年、岡山藩主池田忠雄の担当によって築かれ、石材は備前産の花崗岩が用いられている。正面の石は蛸石とよばれる城内第１位の巨石で表面積がおよそ３６畳、重量は１０８トンと推定される。向かって左手の巨石は振袖石と呼ばれ、表面積３３畳で城内第３位である。

### 5）秀吉、秀頼２代栄華の足跡～本丸と本丸御殿

①大阪城公園本丸の中心部、いま広場になっている空間いっぱいに豊臣大坂城時代、秀吉、秀頼政務の場＝表御殿と秀吉正室のおね、秀頼の母淀、正室千姫ら家族が生活した奥御殿があった。
＊本丸石垣は下の段、中の段、上の段で水濠を囲んだ。自然の地形に沿ったともいえるが、当時の石垣技術の限界でもあった
②徳川大坂城では本丸御殿となった。総構えを縮小、面積は４分の１に縮小したものの天下普請によって築かれた城郭は豊臣大坂城をしのぐ豪壮、華麗なものとなった。
＊徳川大坂城は表御殿と奥御殿が廊下で結ばれた１つ繋がりの巨大建築群となっていた
玄関、遠侍の間、徒部屋、殿上の間、大広間、白書院、対面所、料理の間、黒書院、銅御殿
③徳川大坂城は将軍家の別荘で、秀忠、家光、家茂、慶喜の４将軍がやってきた。
＊慶応２年家茂は大坂城本丸御殿で病死
＊慶応４年慶喜は鳥羽伏見の戦いに敗れて大坂城に逃げ帰り、密かに江戸に脱出
統制がとれなくなった大坂城は火災、火薬庫に引火して大爆発を起した





徳川大坂城

→縄張り
黒田官兵衛

**豊臣秀吉像**（大阪市立美術館蔵）◎豊臣秀吉（1537～98）。織田信長の家臣であったが、本能寺の変の後、天下を統一。

## 6）秀忠旧石天守台に秀吉イメージの復興天守を上げる～第３代天守（自由見学３０分）

①初代豊臣秀吉天守＝天正１３年本丸北東隅に創建、慶長２０年「大坂夏の陣」焼失。後期望楼型、５重７階（屋根裏２階）地下穴倉２階。付け櫓複合式。天守台　m、建屋３５.７m
金箔瓦、黒漆下見板張り。最上階は高覧（らんかん）付きの回り縁が設けられた。

＊信長の安土城、秀吉の大坂城天守は本丸御殿の一部ともいえた。天守に黄金の茶室を作り、望楼から市街や大坂湾を一望した

②２代徳川秀忠天守＝寛永３年建造、寛文５年落雷焼失。層塔形、５重５階地下穴倉　階、総高さ６０m。秀吉天守より２０m高く、１階平面は２倍以上大きい
白漆喰大壁総塗り込め、白亜の殿堂。太閤イメージ払拭し、より豪壮で広大な天守造りをめざした。

③３代昭和鉄筋コンクリート復興天守＝昭和６年建造、築８０年、現存徳川天守台に秀吉天守を変形して復興。秀吉天守をイメージした近代建築といえる。

④天守台は現存、切り込みハギ、算木組み。横メジを意識している。算木組。角石、角脇石。６～８トン

＊金明水井戸屋形。天守礎石、残念石。天保山号砲

⑤サスペンション（吊り下げ）工法＝鉄筋コンクリート造りおよそ１万トンの重量を旧石材にかけないよう、天守台内部に巨大鉄筋コンクリート基礎を築き、その上に鉄柱を立てて全重量を吊り下げた。

⑥無理な時代考証＝四角の層塔型天守台に本来横長の望楼型をあげた。５重望楼は秀吉の黒漆、１～４重は秀忠の白漆喰、時代が混在する。

⑦３重大入母屋造りに望楼を上げる（平屋大入母屋造りに二重入母屋を重ねたようにもみえる）。
平側（正面）＝望楼屋根入母屋造り、しゃち、軒唐破風。３重破風の間、千鳥破風、２重大入母屋、大千鳥破風。初重比翼千鳥破風
妻側（側面）＝望楼屋根、３重、初重入母屋破風

⑧天守内部を自由見学、３０分、集合時間厳守のこと。

＊エレベーターは上り専用５階まで直通。
４階＝豊臣秀吉とその時代、５階なし、６階＝大坂夏の陣図屏風の世界、８階＝豊臣秀吉の生涯、８階＝展望台

⑨多聞櫓跡、銃座。本丸西側水濠を望む。西の丸を遠望。

↑夏の陣図の豊臣天守

←本丸内堀

現在の大阪城天守



## 7）秀頼と淀君自害、豊臣氏滅亡の地～山里丸

①天守北側の低地を山里丸（曲輪）と呼ぶ。豊臣時代には山里の風情をかもし出す松林や、桜、藤の木々が繁りいくつもの茶室が建っていた。秀吉は要人をもてなす場、家族のくつろぎの場として山里丸を利用した。

②秀頼、淀殿自刃の地＝慶長２０年（元和元年）、「大坂夏の陣」で徳川軍に追い詰められた秀頼は山里丸にあったやぐらに潜み自害、豊臣氏は滅亡した。

＊５月７日本丸が落ち、夜には天守にも火がかかり一晩中燃え続けた。翌８日午後２時主従３０人は焼け残った唐物倉で自刃した

③淀君ならびに殉死者３２名忠霊碑

④山里口出枡形＝本丸と山里丸を結ぶ通路に設けられた枡形で、徳川幕府の大坂城再築工事によって築かれた。本丸から山里丸に飛び出していることから出枡形といった。

③極楽橋＝山里丸と２の丸を結ぶ橋。極楽は仏教用語で安楽の世界をさすことから石山本願寺以来の名称とされる。秀吉が築き秀忠が掛け直した。

④刻印石広場

## 8）日本最大深さ３０m、屈曲は強烈な横矢掛り～本丸内堀から駐車場に戻る

①帯曲輪状の２の丸＝市正曲輪を本丸内堀沿いに進む。東側は梅園だが、かつて加番方屋敷、長屋、定番方屋敷があった。

①大坂城の最大の魅力は深い水濠と城壁の屈曲にあり、難攻不落、日本一の堅城といわれるゆえんである。

②堀幅と石垣高さの統一＝本丸堀は堀幅５０m、石垣高さ３０m。２の丸堀同様、複雑強力な「横矢かかり」に注目。基本設計の一貫性が見事に生かされている。

③本丸東面内堀＝このあたりの石垣が大坂城内でももっとも高い。屈曲のコーナー部は櫓跡で櫓を多聞櫓で結んだ。手前から東菱櫓、ほしい櫓、月見櫓、馬印櫓、東南隅櫓。ほぼ直線５００mに５基の櫓をすべて多聞櫓でつないだ。明治の古写真参照。

＊コーナー部＝算木組。三つ石組み、二つ半石組み。究極の石積み技術
このころコーナー部の算木組技術が確立、大坂城は石垣技術の頂点とされる。

④玉造り口門跡
大手口に次ぐ第２の枡形門。巨石を利用した門垣は現存。石をくり抜いた笠石銃眼が残る。

⑤１番櫓＝６番櫓と同形

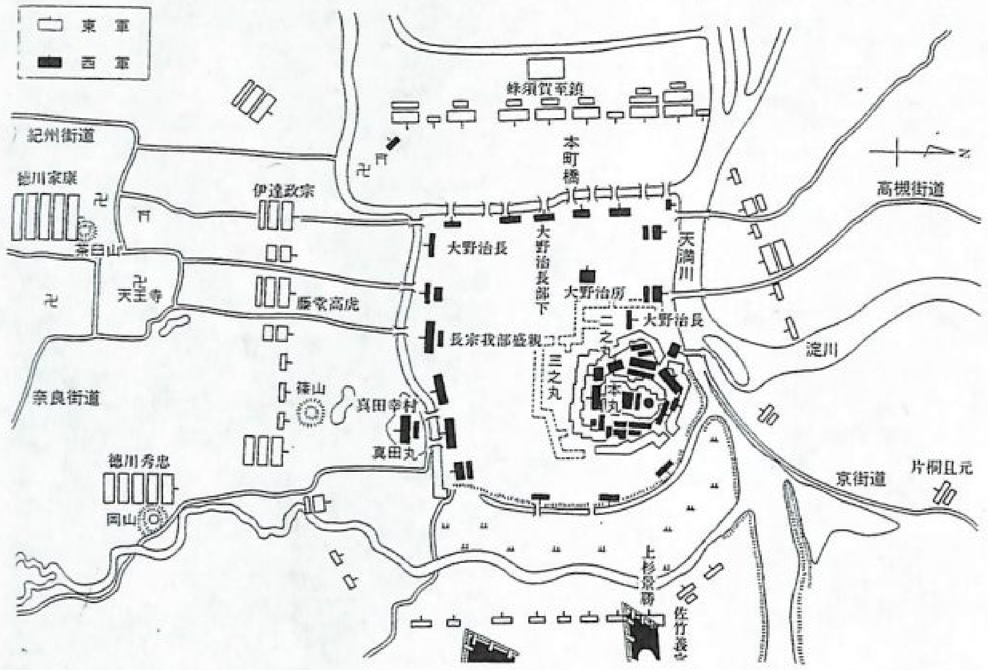
参考資料＝遺跡を学ぶシリーズ天下統一の城大坂城、よみがえる日本の城、日本の城郭を歩く、日本の城、日本の名城３０、歴史群像シリーズ大坂大阪、国宝重要文化財日本の城、ビジュアル日本の歴史、歴史読本織田・豊臣の城を歩く

↑秀頼

←秀頼、淀殿自刃の地

←本丸内堀東面の方写真

↓極楽橋から天守きのぞむ




**1614年（慶長19年）**

| | |
|---|---|
| 5月 | 徳川幕府、方広寺の鐘銘に言いがかりをつける。 |
| 8月17日 | 片桐且元、駿府城へ出向くが承諾できないような条件を示される。 |
| 10月 1日 | 片桐且元、恭順説をとなえるが、裏切り者とされ大坂城を退城。 |
| 10月10日 | 真田幸村、大坂城に入城。 |
| 10月11日 | 徳川家康、駿府城を出発。 |
| 10月23日 | 徳川家康、二条城に入城。徳川方の本隊、江戸を出発。 |
| 11月10日 | 徳川方の本隊、伏見に到着。 |
| 11月17日 | 徳川秀忠、大坂の平野（ひらの）に陣を進める。 |
| 11月18日 | 大坂城包囲網完成。 |
| 11月19日 | 両軍の小競り合いはじまる。 |
| 11月26日 | 大坂城の東北、大和川をはさんで建っている今福、鴫野（しぎの）の2つの砦が徳川方に攻撃され、占領される。 |
| 11月29日 | 木津川河口の博労ヶ淵の砦が徳川方に奪われる。 |
| 12月 4日 | 真田丸の攻防戦。徳川方の惨敗。 |
| 12月17日 | 塙団右衛門、徳川方の陣地に夜襲。 |
| 12月18日 | 大坂城外で最初の和平交渉。 |
| 12月19日 | 講和条件が決まる。 |
| 12月20日 | 徳川方の砲撃停止。 |

**1614年（慶長19年）**

| | |
|---|---|
| 12月21日 | 冬の陣和議の誓書交換。 |
| 12月23日 | 大坂城の堀の埋め立てはじまる。 |

**1615年（元和元年）**

| | |
|---|---|
| 1月24日 | 大坂城二の丸・三の丸の破却工事が終わり、諸大名の軍勢が撤退をはじめる。 |
| 2月14日 | 家康、駿府に帰着。 |
| 3月24日 | 家康、秀頼が大和へ移るか新たに徴募した浪人を解雇するかの二者択一を迫る。 |
| 4月18日 | 家康、京に着いて二条城に入る。 |
| 4月24日 | 家康、秀頼に大和への国替えの最後通牒を発す。 |
| 4月26日 | 大坂方の大野治房、大和郡山城を占拠。 |
| 4月28日 | 大坂方、家康に荷担する堺を焼き討ち。 |
| 4月29日 | 樫井の戦い、塙団右衛門戦死。 |
| 5月5日 | 家康出陣、河内の星田に本陣を置く（大坂城へ12キロメートルの距離）。 |
| 5月6日 | 真田幸村・後藤又兵衛ら、徳川方と道明寺の合戦。後藤又兵衛、薄田隼人正、木村重成討ち死に。 |
| 5月7日 | 幸村総攻撃、家康の本陣をおびやかすが、奮戦むなしく戦死。大坂方敗色濃くなり退却。千姫、大坂城を脱出。三の丸に火の手が上がり、淀殿・秀頼、山里曲輪へ。 |
| 5月8日 | 淀殿・秀頼自刃。家康、二条城に凱旋。 |
| 5月16日 | 家康、参内して大坂のことを報告。 |

戦国時代とはいえ、淀殿ほど数奇な運命を辿った女性も珍しい。7歳のとき小谷城の陥落で父浅井長政と死別し、17歳のとき越前北の庄城の陥落で母お市の方を失った。

成人すると父や母を殺した仇敵秀吉の寵愛を受け、大坂城で天下人の世継ぎを2人も産む。長男鶴松は3歳で夭折するが、次男の秀頼は豊臣政権の相続人となり、淀殿はその母親として絶大な権勢をふるうことになる。

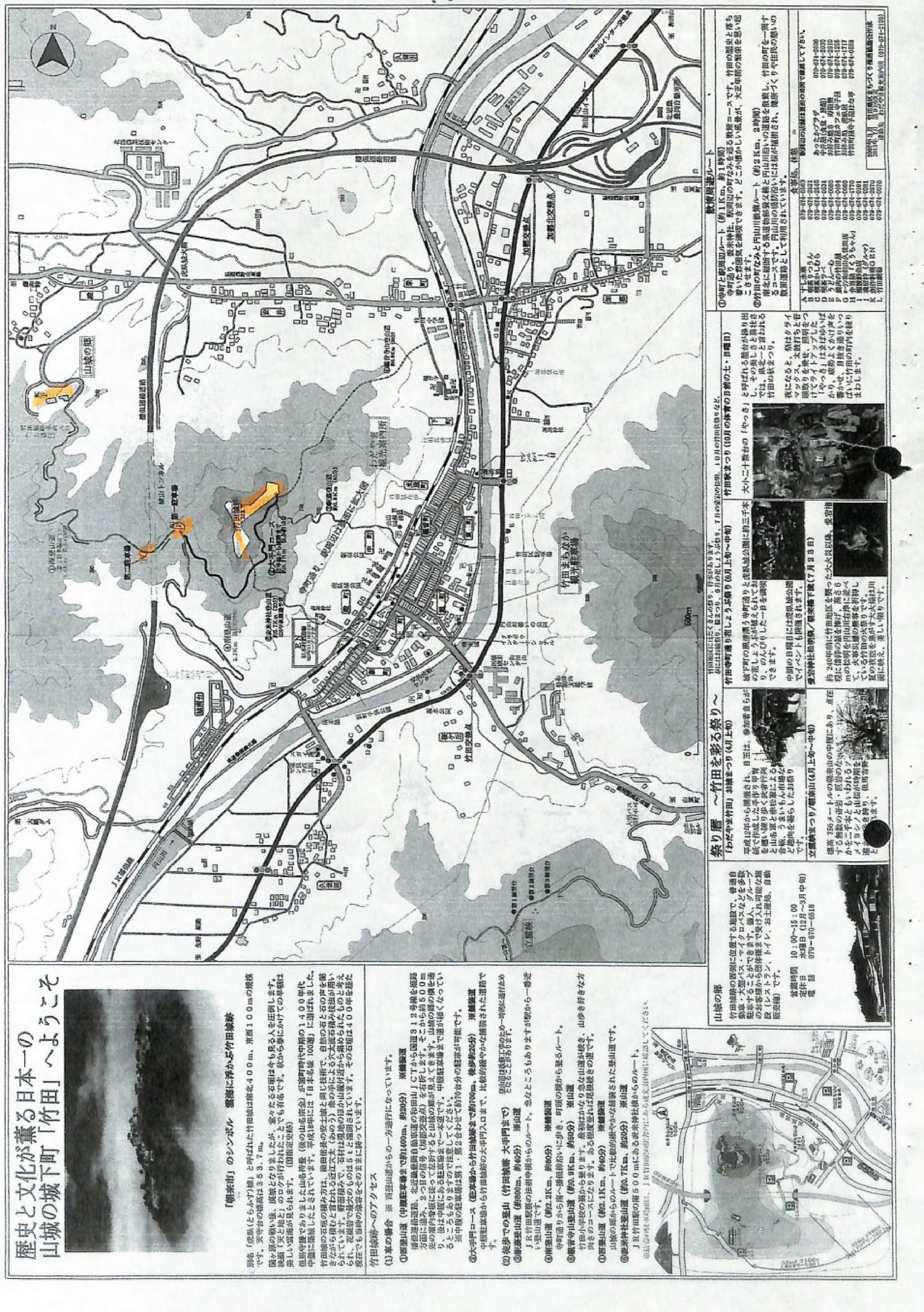
秀吉の死後、正妻である北政所（おね）は髪を下ろし菩提を弔う身となったが、愛妾の淀殿は大坂城に君臨しつづけたので、さまざまな憶測が飛び交った。秀頼は秀吉の子ではない、不倫相手は石田三成であるなど、さまざまな誹謗中傷が捏造された。関ヶ原の戦いの直前には、彼女が次なる天下人と目される家康と結婚するという噂が、まことしやかに囁かれていたほどだ。

難攻不落の大坂城は、天下への執念を最後まで持ち続けた女帝・淀殿の天下の象徴でもあった。しかし、この不動の城も老獪な家康の前についに破れ、大坂の空を赤々と照らして炎上する。淀殿の野望もまた、炎の中に消えていった。

淀殿と大坂城

週刊ビジュアル「日本の歴史」





# 織田信長と豊臣秀吉～竹田城、その時代と城郭

**1）織豊期（系）城郭とその時代（３まで「夏季研修会」の復習）**

①織豊期＝安土桃山時代（１５７３～１６０３）の３０年間のこと
織豊期城郭＝織田信長、豊臣秀吉時代に築かれた城郭をいう。
安土城＝信長が琵琶湖東辺に築いた天下統一への拠点城
桃山＝　秀吉晩年の居城。元和廃城後桃林になったことに由来。桃山文化
大坂時代としないのは徳川幕府の秀吉色一掃政策か

＊織田時代＝天正元年足利１５代将軍義明を追放、「天下布武」へ第一歩踏み出す
同５年安土城を築城して移る。同１０年「本能寺の変」で明智光秀に殺害される

＊豊臣時代＝天正１０年光秀を破り後継者となる。同１４年太政大臣、豊臣姓与えられる。
同１８年小田原征伐勝利で天下統一なる。文禄７年死去、秀頼が豊臣家を継承。
慶長５年関が原合戦で徳川家康勝利、同８年徳川幕府成立

②安土城契機に中世城郭から近世城郭へ一斉移行、一大転換期となる。
中世（戦国時代）の城＝戦闘施設としての山城
織豊期の城＝領内統治と権勢誇示を目的とした見せるための城造り

④徳川時代はじめ、慶長後期の築城ラッシュ＝徳川幕府による「天下普請」助役、有力外様大名による築城、大改修

**2）天守と石垣・水濠の巨城、城は革命的に進化した**

①山城→平城。戦う城→政治の城。権威の象徴としてのみせる城へ
居館と詰め城の統合、城主官邸。支城の整理統合、大規模化。大城下町の融合、セット化。

②石垣構築技術、石工集団の職人化と発達。巨石の切り出し、海陸輸送、石積み。
高石垣の登場＝コーナー部の強化が高石垣と建造物の高層化を実現した
算木組の完成。そり、わどり、屈曲（折れ）。中込め石、かい石。打ち込みハギ

③弓矢の戦いから銃撃戦を意識した縄張りに。空堀→水濠。土塁→石垣。深く広い堀と塁

④桃山文化建造物の開花＝天守の高層化、独立式→複合式→連結式→連立式
天守、櫓の高層化と多用。門の権威化と守備体制の強化。御殿建築の発達

＊礎石建物、天守屋根の金箔瓦

**3）安土城、竹田城、石垣山一夜城～織豊城郭遺構が色濃く現存**

①織豊期城郭は全国に数百城規模で築城された。
豊臣時代や江戸時代はじめ廃城となったものに当時の面影をそっくり残す城がある。

＊安土城、竹田城、石垣山一夜城

②江戸時代に引き継がれた城はその後大規模な改修が加えられた。姫路城や甲府城、二本松城、上田城など織豊期と近世城郭が混在している。

＊今回見学する姫路城では新旧時代の石垣継ぎ目などが見られる

③一方大坂城は信長と秀吉の総結集城ではあったが、「大坂夏の陣」で焼き払われ、再建徳川城では、家康、秀忠の強い意志ですべてが埋没された。今回見学した表土には当時の石も土の一片も存在していない。

←安土城

←石垣山一夜城



# 累々と石垣が連なる～織豊期城郭の傑作竹田城を歩く

**1）山名氏の国人太田垣氏が築き、秀吉家臣の赤松広秀が織豊期石垣城に大改造**

①室町中期、応仁の乱西軍総大将となった但馬守護職・山名宗全の命を受けた太田垣氏が築城。
当時は典型的な中世山城で、以後但馬の筆頭国人・太田垣氏居城となる。

②天正５年の信長但馬進攻で、秀吉軍の弟秀長が落し信長の領国となる。

③天正１３年、秀吉の家臣となった旧在地豪族の赤松広秀が入り、総石垣の織豊期城郭へと大改修する。広秀の所領は２万石程度であり、大坂城北面の守りとして秀吉の強い援護があったといえる。

④赤松氏は慶長５年の関が原の合戦で西軍に与して改易、廃城となるが、ほとんど「城割り」されることなくそのまま放置された。

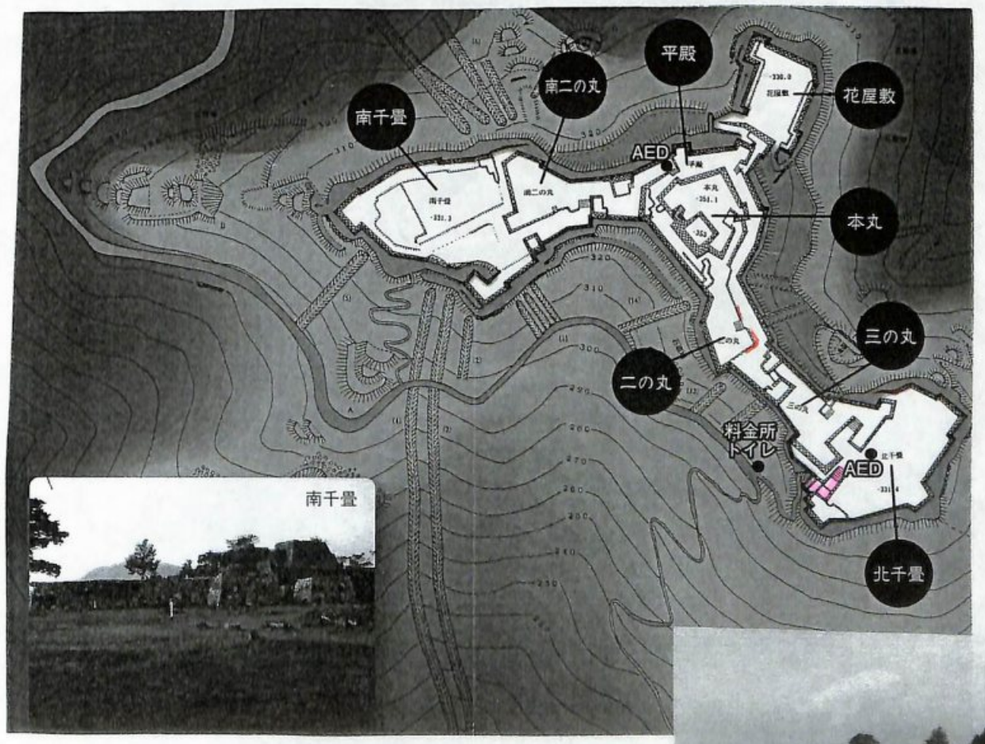
**2）別仕立てのマイクロバスに分乗～山城の郷から大手門へ**

①竹田城は但馬国府跡に近い、京都方面への玄関口に立地する山城で、主郭標高は３５３ｍ、三方逆Ｙ型に広がる尾根に連なる主郭部と城下でもある山麓居館部、根古屋集落とは、比高およそ１５０ｍ、歩いて４０分の急坂になっている。

②織豊期城郭ではあるが居住区は山麓と考えられる。城下から見上げる高石垣や天守、櫓は圧巻だが、戦う石垣城の面影が漂う

③中継地点「山城の郷」から別仕立てのマイクロバスに分乗、第１駐車場で降車、後は徒歩。
道筋に中世太田垣氏時代の竪堀が連続する。竪堀は攻め手の横移動を抑える。
料金所横に急坂の登城道と竹田城碑を横目に、ほどなく大手門に到着。

＊駐車場からの登城道は帯曲輪であろうか。雑木を払えば城内から強力な横矢がかかる




市の公式パンフレットの絵地図

### 3）石垣櫓に囲まれた堅固な大手門の守り～大手門と北千畳郭

①大手門＝正面に大手の門垣が立ちふさがる。
両脇、正面にそびえる石垣壁。左右は櫓台で連続枡形にみえる。間の石段が大手道。
攻めにくい登り階段、城内を見通せない左折れ枡形。もし攻め込めば左右正面の櫓から弓矢鉄砲の集中攻撃を受ける。両側から強烈な横矢がかかる。
＊枡形や櫓の建造物様式は未詳
②大手門の内側は北千畳郭で広い空間になっている。中世城郭では通常２の丸。空間は兵の集結場で城主が着到を改め、兵の出撃を指揮する。
③北千畳の先端は飛び出しが多くそれぞれ微妙なコーナー部を形成している。急ガケや石垣から攻め上る敵兵への横矢となる。先端の天端（てんば）に塁跡がなく平らなことは、塀などの構築物の土台が回されたことを示している。
③北側先端櫓台、東側先端、南側先端から周囲の山々、城下、南千畳郭、天守、花屋敷郭方向をゆっくり一望。巨大石垣城郭のスケールを実感する。

### 4）曲がりくねり、上がったり下りたり～３の丸の縄張り

①塁壁は北千畳と３の丸との仕切りライン。中世土の城時代は空堀、土塁で区切った。
②町では穴太（あのう）積みとする＝安土城など「穴太積み」を称している城も多い。
穴太衆＝美濃の坂本町穴太に住んだ石工集団。馬淵、岩倉などとともに信長、秀吉の城郭石積みを担当、後代は石工の総称で穴太出身者以外の石工も「穴太衆」を名乗った。
③竹田城石垣の特徴＝打ち込みハギに属する。織豊期の石積み技術で、あら加工した石材で、詰め石や裏込め石を使う。表面加工もありそう。
④竹田城の石材は全山石山、自前の花崗岩。硬いが石目にそって割れやすく表面が平で四角っぽい石材も作りやすい。
⑤大手正面櫓台の石積み（参考図参照）
＊城郭の石垣はピラミットのような総石積みではない。芯は土で表面を石材で包む。
＊穴太衆の石積み＝置き位置は石に聞け。体験からくる自然積み

←北千畳↓

＊穴太積み＝各段ごとに、コーナー部に角型の大き目の石を置く。間に大きめの石を据え、中石で高さをそろえる。後世タブーの竪積みもある。大石はやや高めに据える。天端は平石、中石で調整して平らにする。裏込め石あり
＊天端が平＝櫓台上に横矢のための櫓を上げた
⑥切り石矢穴＝あら割り石主体で１部切り石か。
⑦３の丸虎口＝大手門と同じ強烈な横矢。両側に櫓台。かぎ型の登り坂枡形門。
⑧井戸郭、武者走り帯曲輪への枡形虎口
⑨太鼓櫓台、２の丸武の門＝複雑な仕切り、２の丸をさらに２つの郭にわける。曲りくねりは防御ラインを連続することでより堅城にする。
⑩石垣のでっぱり＝わずか１、２石の飛び出しが横矢に変わる。

### 5）本丸石垣、天守台を回る～２の丸

①出土した瓦＝礎石、瓦葺き建造物の出現。金瓦はない。
②一段高まったところに２の丸がある。
③北端先端は鋭角のでっぱり、やや進むとなだらかなコーナーがある。南千畳側のゆるやかな塁線折れの景観は抜群、ぜひともカメラに収めたい。目の下の竪堀も見逃せない。
④本丸への２本の登城道は通行止め。去年の転落事故の影響で本丸が立ち入り禁止になっている。
残念だが迂回しながら本丸石垣と標高３５３ｍの天守台を見上げる。
＊天守の重構造など詳細は不明。本丸の建造物も調査解明が進んでいない。
⑤２の丸帯曲輪でいったん解散。
普通の人は南２の丸から南千畳、マイクロチャーターバスが待つ第１駐車場へ戻る。
元気組はいそぎ足で花屋敷郭を回りみんなの後を追う。

### 6）花屋敷郭はからめ手脱出口～南千畳郭から駐車場に戻る

①花屋敷郭＝からめ手の郭。脱出道。一段下の郭から石垣群を連望。
②南２の丸＝南側に備えた２の丸。堅固な虎口。
③南千畳＝広い空間。全景をみたら虎口へ。
④降り口（南千畳虎口）は南２の丸と南千畳の間にある。通り過ぎない注意しよう。
降り口からは一本道。登城道に下りたら５分ほどで第１駐車場に出る。

南千畳方向をのぞむ

登城がつづく

２の丸から天守台

monoストーリー

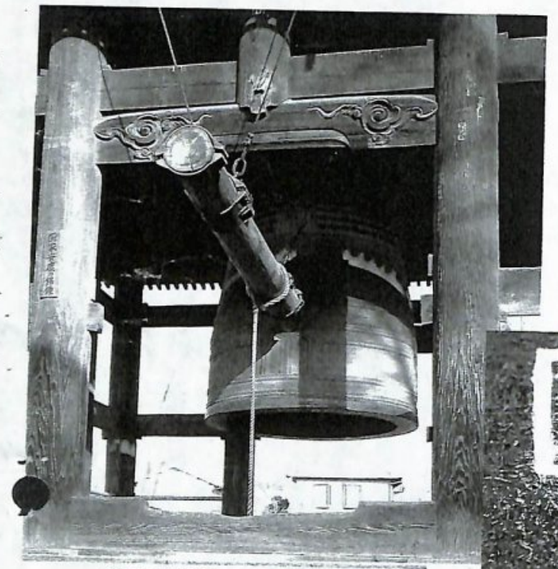
# 推定無罪!?方広寺鐘銘事件

豊臣秀吉が1595年（文禄4年）に創建した方広寺は、奈良の大仏より巨大な大仏を安置して評判を呼んだが、その翌年、地震のために倒壊した。秀吉の死後、後継者の秀頼が再建をめざし、1612年（慶長17年）に銅像の大仏が落成する。

1614年（慶長19年）に梵鐘が鋳造されたが、この鐘に刻まれた「国家安康」の文字が問題になった。「国家安康」は「家康」の名を「安」の字が引き裂く形になっている。これは自分に対する呪いだと家康が言いがかりをつけたのである。この謀略をめぐらしたのは、家康のブレーンの1人、金地院崇伝であるといわれる。

また、同じくブレーンの1人である林羅山は、「君臣豊楽　子孫殷昌」というメッセージを「豊臣を君として子孫の殷昌を楽しむ」とむりやり読みかえ、豊臣氏の繁栄を祈ったものだとこじつけた。

家康のこの言いがかりは、豊臣家を滅ぼす戦いの口実をつくり、また同時に、豊臣方内部の分断をはかるものであった。豊臣方はこれにまんまとのってしまったのである。



方広寺の大仏も建物も、その後何度かの火災や地震にあって倒壊焼失し、現在はこのいわく付きの梵鐘（ぼんしょう）と鐘楼が残るだけである。右は問題の「国家安康」の銘文の拡大写真。

【アクセス】バス「博物館」下車徒歩5分または京阪電鉄「京阪七条」駅下車徒歩10分。

## 豊国神社

区内大和大路通正面東入ル茶屋町。市バス馬町下車3分　N34°59'17"　E135°46'31"

慶長三年（1598）八月一三日、伏見城で六二歳の生涯を閉じた豊臣秀吉を祀り、一般に〝豊国さん〟の名で親しまれている。秀吉は遺言により、洛東阿弥陀ケ峰（現社地の東約一・五キロ）に葬られ、翌四年、朝廷より豊国大明神の神号を受け、その西麓に社殿が営まれた。当時社地は約一〇〇平方メートルにも及び、社殿造営には豊臣恩顧の大名が競って参加したので、壮大華麗をきわめたという。

元和元年（1615）、大坂夏の陣で豊臣氏が滅びると、社殿は徳川氏によって取り壊され、長い間、荒廃したままとなっていた。現在の社殿は、旧社地の西、方広寺境内に明治一三年に再建されたものである。

伏見城から移したと伝える唐門が国宝に指定されているほか、社宝にも秀吉・秀頼の文書など、安土桃山時代の貴重な遺物が多い。これらの遺物は境内宝物館に所蔵展示されている。また唐門左右の八基の石燈籠は、大野治長ら秀吉の遺臣たちが奉納した、創建当時の遺物である。また本殿の左にある鉄燈籠は、当時天下一といわれた、三条釜座鋳物師、辻与次郎の作として有名である。

豊国神社

### 唐門

参道正面に建つ。前後が唐破風、側面が入母屋造、檜皮葺きの四脚門で、雄大豪放な墓股や彫刻を施し、安土桃山時代の特色をよく示している。この唐門は伏見城の遺構と伝えられ、初め二条城に移されていたのを金地院に移し、明治の再建の際、現在地に移したという。

## 方広寺

区内正面通大和大路東入ル茶屋町。市バス博物館三十三間堂前下車5分　N34°59'20"　E135°46'29"

俗に〝大仏殿〟の名で知られ、豊国神社の北隣にある。豊臣氏滅亡のきっかけとなった寺として名高い。天正一四年（1586）、豊臣秀吉が奈良東大寺にならって大仏殿を建てたのが起こり。この大仏は高さ約一九メートルで、大仏殿とともに東大寺のそれよりはるかに大きかったが、落慶の文禄四年（1595）の翌年、慶長元年の大地震で崩壊、さらに同七年冬、火災で堂宇を焼失してしまった。

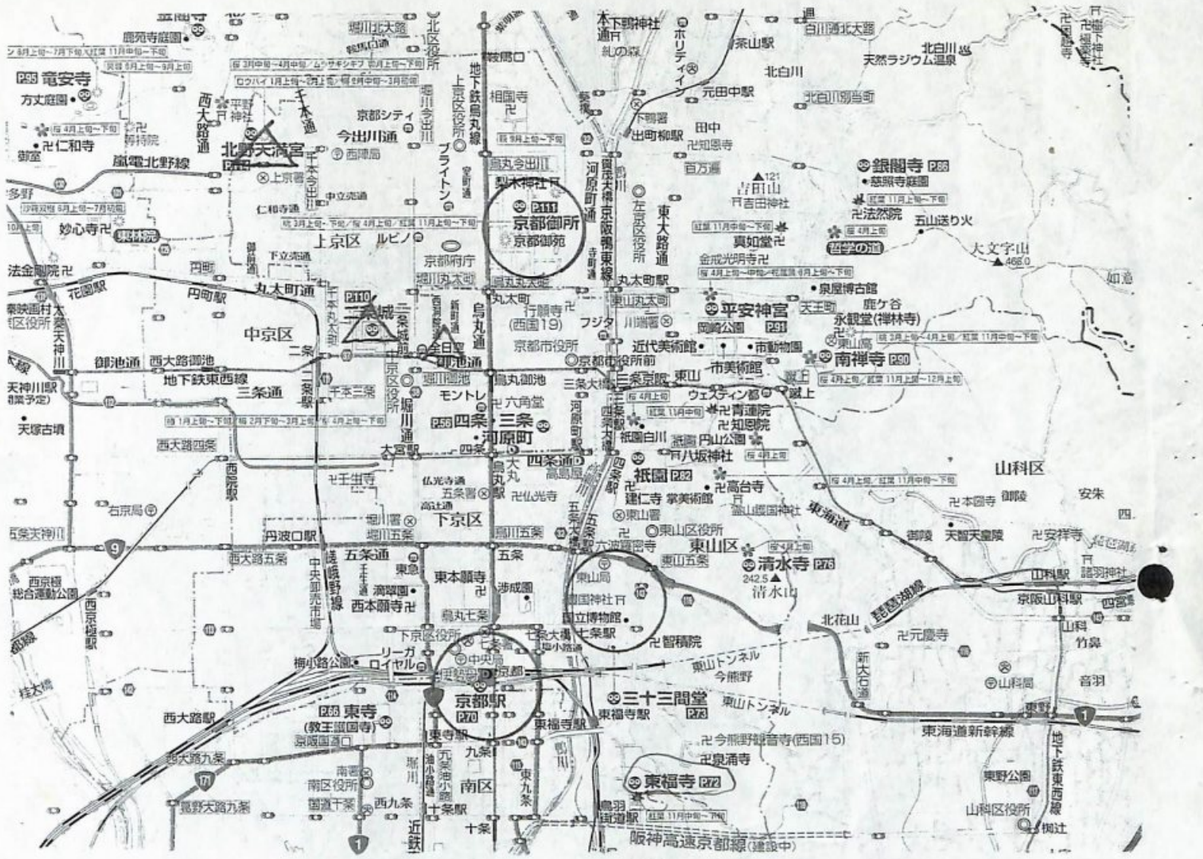
徳川家康は秀吉の遺児豊臣秀頼に、大仏殿の再興をすすめ、慶長一五年に工を起こし、同一七年に完成した。大仏は木像を改めて金銅仏とし、つづいて一九年二月、高さ四メートルの大鐘を鋳造した。同年八月、落慶供養したところ、鐘銘に「国家安康　君臣豊楽」とあったことに対して、家康は「家康の名を分断して呪い、豊臣を君として楽しむ」と解釈していいがかりをつけ、強引に大坂の陣を起こし、豊臣氏を滅ぼした。

その後、大仏殿は寛文二年（1662）の地震で崩壊し、金銅仏は鋳つぶされて寛永通宝に改鋳された。天保一四年（1843）、尾張国から寄進された半身の木造大仏も、昭和四八年火災で焼失した。

豊臣氏滅亡の因をつくった銅鐘は、現在明治一七年建立の鐘楼にかけられており、国の重要文化財に指定されている。

（宗派）天台宗　（開山）木喰上人応其
（重文）梵鐘






## 京都御所

区内京都御苑。地下鉄烏丸線今出川駅下車3分　N35°01'15"　E135°45'53"

明治維新まで天皇の住まわれたところで、京都御苑の中央北寄りにある。南北四四八メートル、東西二四九メートル、面積約一一万平方メートル、五筋の白線をつけた築地塀と、小さな溝をめぐらし、南正門に建礼門、北に朔平門、東に建春門、西に宜秋門・清所門・皇后宮門を設けている。

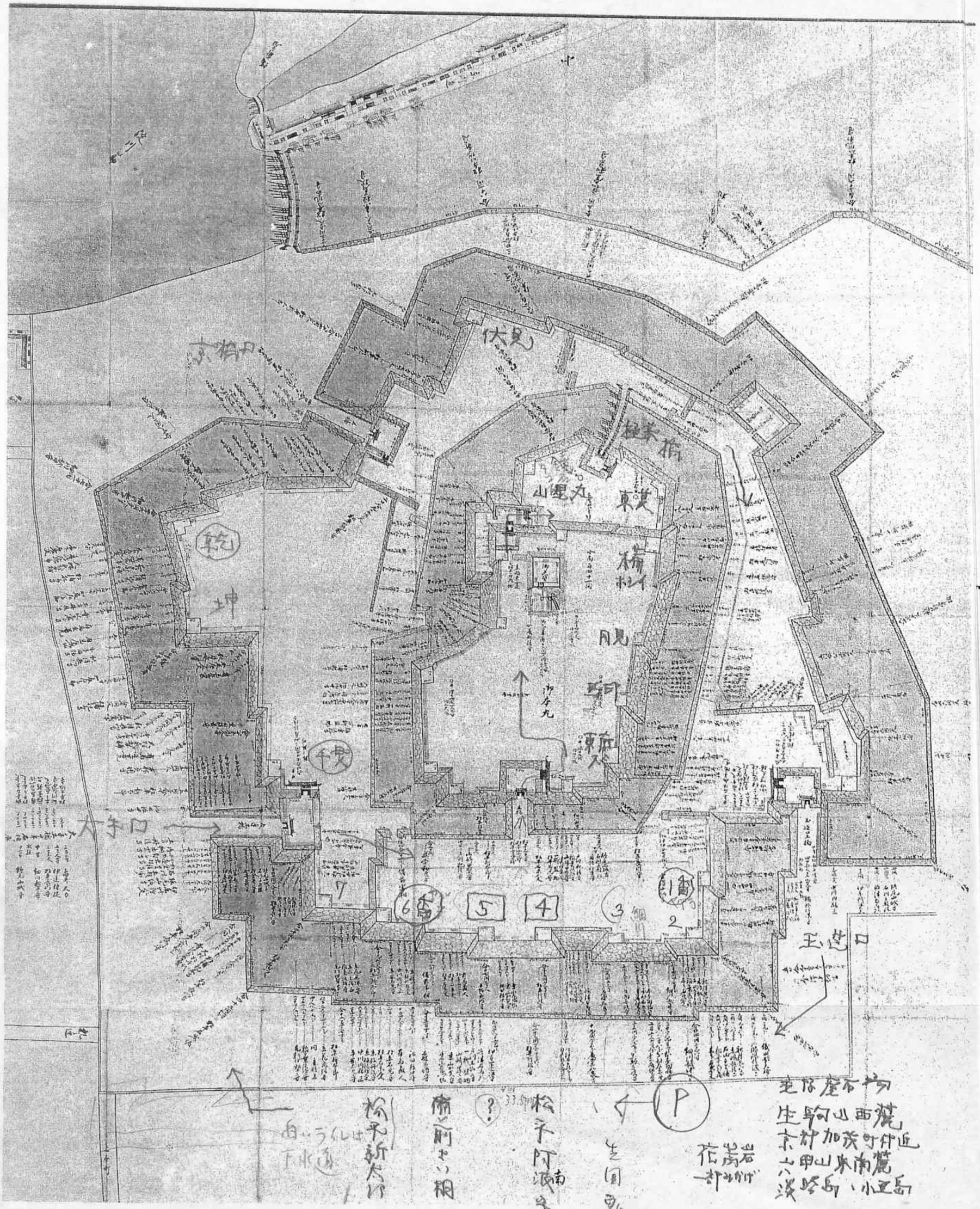
鎌倉末期の元弘元年（1331）、北朝の光厳天皇が藤原邦綱邸を里内裏（仮皇居）とし、地名から東洞院土御門内裏とよんだのが最初である。その後たびたびの火災、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康の修理・新造を経て、天明八年（1788）一月二〇日、京の大火で類焼、時の老中松平定信が中心となり、平安朝の古式にならい、寛政二年（1790）、再建された。しかし嘉永七年（1854）、また焼失、現在の建物は安政三年（1856）、寛政の造営の旧規によって再興されたものである。

御所の正殿である紫宸殿は、御所の南端建礼門の正面にあり、南殿ともいう。桁行約三〇メートル、奥行約一二メートル、入母屋造・檜皮葺き・高床式・総檜の寝殿造で、天皇の元服・即位など、重要な儀式の行われるところ。母屋には、大正天皇即位の折、古式を勘案してつくられた金色に輝く高御座と、その右に皇后の御座がある。正面に階段を設け、その前に有名な左近の桜と右近の橘がある。

御所の南東に、仙洞御所・大宮御所がある。仙洞とは、上皇の御所のことで、寛永六年（1629）、徳川幕府が後水尾上皇のため建立したもの。もと桜町の仙洞とよばれていた。建物はたびたび火災で焼失、現在は、寛永一一年（1634）、小堀遠州が庭師賢庭に作庭させた池泉回遊式庭園のみが残っている。仙洞御所と廊下で結ばれていた大宮御所も、嘉永七年（1854）の火災後は再建されていない。

御所内の建物は、多くは幕末期の建立で、また第二次大戦中、空襲を避けるため、取り除かれた部分も多いが、なお平安時代の優雅な面影を十分にとどめている。

京都御所　蛤御門




付録　大坂城大名丁場割図

大阪府立中之島図書館蔵

元和6～9年 北側外曲輪、2の丸東北西外堀天守台、完成1～3 本丸・山里丸 完成5～6 2の丸南外堀

1058

城を歩く会「20周年記念1泊見学会」メモ（姫路城・方広寺・豊国神社）

2014年10月８日　保 科 隆 夫

# 姫 路 城（世界遺産・国宝・国特別史跡・国重文）

望楼型(５重６階地下１階)・連立式

西の丸・化粧櫓（右側手前）につづく渡櫓



## 小 史

### （１）白鷺城

2014年６月、姫路城大天守の工事用の囲いが撤去された。壁面や木材などが劣化したことによる半世紀ぶりの本格的な修理。2009年に始まり、2015年３月に完了する予定である。塗り直した壁や、瓦の目地の漆喰（しっくい）で大天守全体が白っぽく見え、困惑と驚きの声が聞かれた。「真っ白だ」「白鷺城ならぬ白すぎ城ではないか」。しかし、これが本来の姿なのである。白さが特徴の城なのだ。⇨「白鷺（はくろ）城」

### （２）黒田官兵衛⇨羽柴秀吉⇨池田輝政⇨本多忠政

黒田官兵衛 ㊀
池田輝政 ㊁

播磨国府が置かれた姫路は、中世においても府中として播磨の中心的都市であり、山陽道と山陰道とを結ぶ基点で、出雲街道・因幡街道・但馬街道が分岐しているという、要衝の地であった。

中国攻略の拠点として羽柴秀吉が黒田官兵衛から譲られた姫路城に補強の手を加え始めたのは天正８年（1580）であった。秀吉は官兵衛の「この海陸交通の中心である姫路城を本拠にしていただきたい」という勧めで姫路城に入ったのだ。現大天守の地下から秀吉時代の天守台の石垣が出土している。この天守は３重４階の望楼型であった。その後、秀吉の弟・秀長が２年間、秀吉の妻ねねの兄・木下定家が16年間、姫路城主だった。

慶長５年（1600）の関ヶ原合戦の戦功により池田輝政（家康の次女・督姫の女婿）が播磨52万石を与えられて三河吉田15万2000石から姫路に入り、秀吉の天守を解体して慶長14年（1609）新たな天守を造営した。城下を取り囲む総構えの堀もこのときに築かれたものである。

輝政は続いて備前（32万石）と淡路（６万石）を加増され、90万石の大身代に出世する。⇨「出世城」「西国宰相」

さらに、大坂夏の陣後、家康の命により本多忠政が元和３年（1617）、伊勢桑名10万石から15万石で姫路に入城。翌年、嫁の千姫のために西の丸を造営した。

姫路城の縄張りは姫山と鷺山という、並立する小丘陵を利用した平山城である。姫山には天守を構え、曲輪は複雑に配置されている。一方、鷺山に構えられた西の丸はきわめてシンプルな構造を示している。

こうして現存に近い姫路城がほぼ完成したが、近世城郭史における最盛期の、最も美しいといわれる城である。

この城は、美しさのなかに、当初は大坂にあった豊臣家の監視と、後に豊臣恩顧の西国大名への牽制という、戦略的目的を担っていた。籠城戦を想定して大天守の地階には流し台や厠（かわや）が設けられたが、幸い使用されることなかった。⇨「不戦の城」

本多家の後、藩主は奥平松平・越前松平・榊原・酒井と譜代・家門が目まぐるしく入れ替わったが、巨大な姫路城を維持していくには、15万石という禄高では非常な重荷であったようだ。

## データ

**（1）国宝**： 大天守、東・乾・西の小天守、ならびに、イ・ロ・ハ・ニの渡り櫓の８件。

**重文**： 「菱の門」「化粧櫓」など、国宝以外の建造物74棟(櫓・渡り櫓27棟。門15棟。塀32棟）

**（2）天守**： 日本初の連立式天守（＝天守と２基以上の小天守が渡り櫓で結ばれる形式。ほかに伊予松山城が現存）

望楼型天守でもある⇨天守出現期の構造。御殿建築から派生した。１階または２階の入母屋造りの建物のうえに２階または３階の建物を載せる。巨大な屋根上に物見の望楼を載せたような形状から望楼型と呼ばれる。安土城・犬山城など。

（：層塔型＝関ヶ原合戦後に現れた構造。各重の屋根を四方に葺き下ろし、上階を規則的に逓減させて積み上げていく構造。その構造が五重塔と同じであることから層塔型と呼ばれる。名古屋城・宇和島城など）。

普請奉行：池田家筆頭家老・伊木長門守忠繁。大工奉行：桜井源兵衛。

**（3）世界遺産**： 平成５年（1993)、法隆寺とともに日本で初めて世界文化遺産に登録された。ユネスコの選考委員会の推薦理由：「木造建築物として建物の容積と配置が絶妙にバランスがとられ、白漆喰の城壁を持つ優れた美をもっている」

**（4）工学博士・内藤昌（あきら）氏(都市史・建築史)の評価**： 「慶長の中期から後期（1605年ごろから15年ごろ）にかけては、いわゆる築城ブームの時代であって、実戦的な施設が一段と発達した時期であり、姫路城も例外ではなく、ありとあらゆる工夫が認められる。狭間付きの櫓・門・塀を地形と組み合わせたその全体としての結構（＝組み立てたさま）は、まことに巧妙複雑で、まさに城郭建築の極致というにふさわしい」。

**（5）工学博士・三浦正幸氏(古建築専門家)の評価**： 「姫路城大天守は、防備が厳重なこと、その防備装置の画期的なことで他の天守とは一線を画す。臨機応変な建築計画でありながら、破綻せずに、かえって崇高な造形美を創出している。天守の歴史上で随一の傑作であり、国宝中の国宝といえるのである」

## 城を歩く

### （1）大手門から城内へ

姫路は総構え（＝総曲輪）の町である。三方を山に囲まれ、南流する市川と夢前（ゆめさき）川のほぼ中央に位置する姫路城。外濠（山陽本線・姫路駅付近の線）が町屋を囲い込み、中濠（国道２号線）は家臣の屋敷を守り、さらに進むと、悠々と水をたたえた内濠に行き当たる。内濠にかかる桜橋を渡ると、姫路城見学の表玄関・大手門（桜門）である。

大手門を入ると、右手は「三の丸」跡。江戸期には城主の居館や政庁が置かれ、また、



本多忠刻（ただとき）・千姫夫妻の下屋敷「武蔵野御殿」があった。しかし、明治初期、陸軍の兵舎設営のため、建物はすべて取り壊され、現在は芝生の広場になっている。

三の丸の入場券売場付近に、昭和の大修理の際、交換された大天守築城当時の「旧西柱」が展示されている。

### （2）菱の門から二の丸を回る

**「菱の門・東方石垣」**
秀吉時代を代表する石垣。野面積みの「布積み崩し」の典型である。

**「菱（ひし）の門」**
脇門付き櫓門。入母屋造り・本瓦葺き・白漆喰総塗り籠め造り。番人詰め所と馬見所があり、格子窓・華頭窓・白漆喰庇付き出格子窓の桃山時代の優雅で豪華な城門。正面の冠木に門名になっている木製の「花菱」が飾られている。

**「三国堀」**
菱の門の前に「三国堀」と呼ばれる「捨て堀」が掘られている。この堀によって通路を狭め、攻め込んできた敵兵を追い詰めて討ち取りやすくしたもの。姫山と鷺山の雨水をここに集め、排水路に流す役割もあったともいわれる。三国とは、播磨・淡路・備前のことか。堀のたもとから眺める天守群の姿は、きわめて優雅である。

**「いの門」「ろの門」**
脇戸付き高麗門。切妻造り・本瓦葺き。「ろの門」内に石棺、北側石垣の南面下に刻印が見える。「はの門」に至る坂道から眺める天守の姿も美しい。鉄砲狭間とともに絵になるような風景だ。

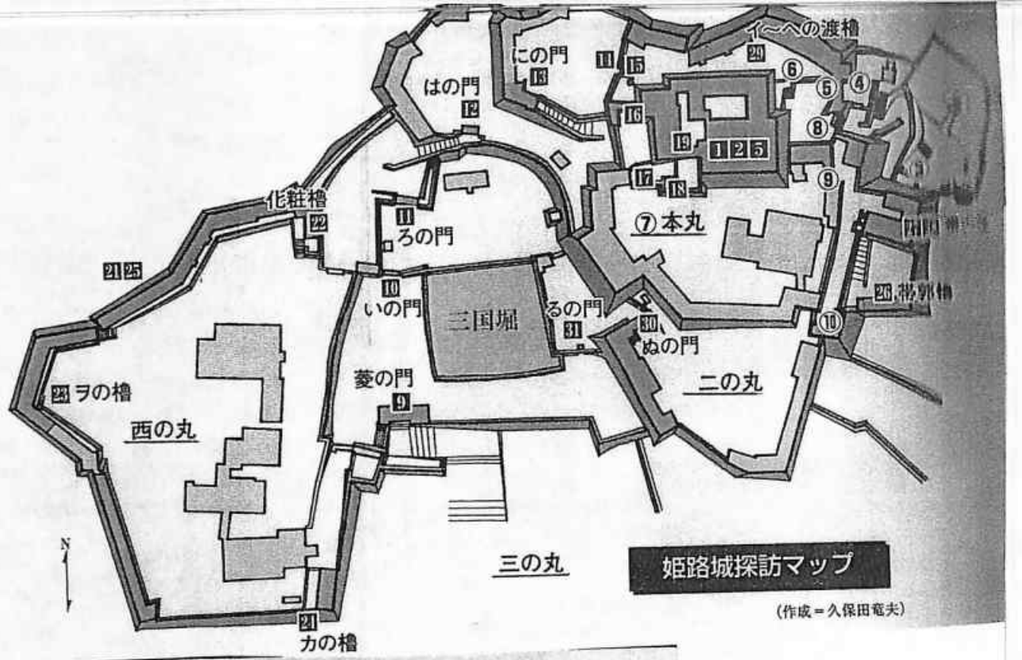
**「はの門」**
脇戸付き櫓門。切妻造り・本瓦葺き。有事には土砂などで封鎖する。
「はの門」から天守に至る道は曲折した迷路のようで、この城の堅固さを示している。

**「にの門」**
潜り戸付き櫓門と二重２階隅櫓を結ぶ続き櫓を組み合わせた鉄板張り門扉の変形櫓。天井は低く、通路は直角に曲がり、登り勾配である。

**「ほの門」**
塀中門で片開き扉の埋門。門扉は鉄板張り。この門も、有事には土砂などで封鎖する。

**「油壁」**
城内で１カ所だけ残る築地塀。粘土や豆砂利を混ぜ合わせ、もち米のとぎ汁で固めたといわれる。池田輝政以前と伝わり、古い版築（吉野ケ里や法隆寺などでも使用された工法。土を突き固めて強度を出す壁作り工法）で造られている。鉄砲の弾も弾き返すという堅固さ。非常時は油塀を倒し、「ほの門」を防ぐためだったか。

**「土塀の石落とし」**
土塀上部に石落としが。城内に３カ所しかない珍しい設備。




姫路城探訪マップ

(作成＝久保田竜夫)

## 現存姫路城要図

## ●の門 東方石垣

ひしのもん とうほういしがき

秀吉時代を代表する石垣で野面積みの「布積み崩し」の典型。

## いの門

いの門

## ろの門

ろの門

## にの門

にの門と東方上土塀

## 菱の門

## はの門

## ほの門

塀中門で片開き扉の埋門。門扉は鉄板張り、有事には土砂などで封鎖します。

## 土塀の石落し

## 扇の勾配

## 補強石垣

## 控塀 ひかえべい

## 石垣の稜線

## 鏡石

かがみいし

探してみよう！

## ぬの門

ぬのもん

## るの門

るのもん

## チの櫓・リの一渡櫓・リの二渡櫓

上山里曲輪を守る櫓群で石落しや狭間などを備えています。

左よりチの櫓、リの一渡櫓、リの二渡櫓、ぬの門

## 【天守の構成】

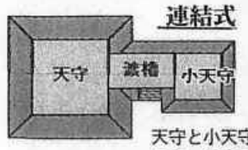
### 独立式

天守だけが単独で建てられている。宇和島城、丸岡城。

### 複合式

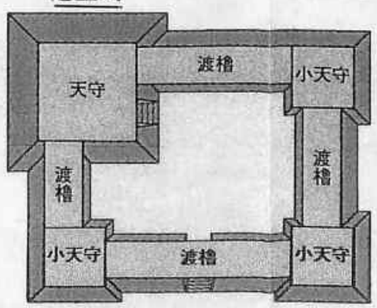
松江城、彦根城。

### 連結式




天守と小天守が渡櫓で結ばれる。名古屋城、松本城。

### 連立式




天守と２基以上の小天守が渡櫓で結ばれる。姫路城、伊予松山城。

## 太鼓櫓(への櫓)

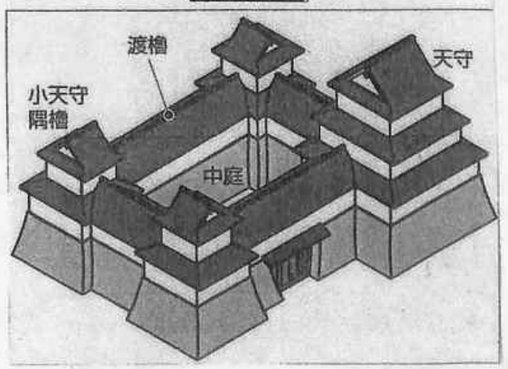
たいこやぐら(へのやぐら)

## りの門

本多忠政の嫡男・忠刻と徳川家康の孫・千姫の居館

西の丸全景

## 連立式天守



**「補強石垣」**
江戸時代初期の補強石垣。

**「控え塀」**
補強のための塀。板を渡して攻撃に利用する。

**「扇の勾配」**
打ち込みハギの石垣。隅角部は算木積み。輝政の居館がある備前丸を支える石垣で上部に行くほど反り上がっている。敵に石垣をよじ登らせないための工夫。

**「鏡石」**
「人面石」とも。呪術的な意味を込めた大石。

**「ぬの門」**
脇戸付き二重２階の櫓門。切妻造り、本瓦葺き。門扉は鉄板張り。

**「石垣の稜線」**
稜線を境に、右手が秀吉時代、左手が輝政時代の石垣。

**「上山里曲輪」**
「ぬの門」を入ったところにある曲輪。備前丸の南下段に位置する。下記の建物がこの曲輪に建造されている。建物群はこの曲輪を守る目的から、石落としや狭間などを備えている。この曲輪の下部には秀吉時代の野面積みの古式石垣が。

**「チの櫓」**
二重２階の隅櫓。入母屋造り、本瓦葺き。櫓自体に入口はなく、「リの一渡り櫓」から出入りする。

**「リの一渡り櫓」**
二重２階渡り櫓。本瓦葺き。土庇が「リの二渡り櫓」まで大きく張り出している。
特別公開展「官兵衛の歴史館」が。

**「リの二渡り櫓」**
二重２階渡り櫓。本瓦葺き。１階の城外側は石垣壁。

**「お菊井戸」**
浄瑠璃などの題材になっている。

**「太鼓櫓」（への櫓）**
一重１階折れ曲がり櫓。入母屋造り、本瓦葺き。

**「りの門」**
脇戸付き高麗門。入母屋造り、本瓦。「慶長４ねん、大工五人」の墨書で秀吉の義兄・木下家定時代と分かった。

**「るの門」（穴門）**
「菱の門」から三国堀に沿って「ぬの門」に抜ける近道。石垣に開けられた埋門の一つ。



**（３）天守群を望む**

大天守。標高46メートルの姫山上に46メートルの大天守が載っている。

外観は５層だが、地下１階・地上６階の巨大な木造建造物。地階から６階床下間に「東大柱」「西大柱」の２本の心柱が突き抜けている。柱の高さ24.6メートル、根元の直径95センチ。１階は165坪の広さ。６階に姫路城の守護神を祀る「長壁（刑部）神社」が。天守に神社があるのは姫路城だけである。

大天守に隣接して東小天守・乾（北西）小天守・西小天守が。乾小天守は３小天守中最大で、外観は３層だが、内部は地下１階、地上４階である。小天守と大天守は、イ・ロ・ハ・ニの４つの渡り櫓で結ばれている。

大天守は、２層の大入母屋に３層の望楼を乗せた望楼型で、姫路城の美しさは、交互に入り交じる唐破風と千鳥破風、巨大な出格子窓や竪格子窓と白漆喰総塗り籠め壁とのバランスにある。外見的に美しいばかりでなく、実戦上の配慮が十分になされている。
南正面２階には幅５間＝約10メートル（１間は約２メートル）の格子窓が見える。現存12天守でこれほど大きく、また多い例はなく、また、壁面に占める窓の割合が歴史上で最大の天守であろう。通常の天守は防備を優先するあまり、窓が小さく、内部が薄暗くて籠城時の居住性はないがしろにされがちだが、この大天守は風通しもよく、快適のようだ。

石落としだが、開口部の幅は約15センチくらい、長さが約１間である。幅15センチでは握りこぶしほどの石しか落とせない。実は石落としは、鉄砲を撃つために設けられている。

また、各重の軒下には横長の高窓をしつらえている。鉄砲を発射したときに噴出する多量の煙を排気するためだ。火縄銃の発射薬は黒色火薬であるため、一斉射撃をしたら、火薬にむせんで籠城どころではなくなる。

各窓も縦長である。室内の換気や明るさに配慮したものである。しかも、突き上げ窓でなく、引き戸である。

**（４）西の丸に入る**

**西の丸櫓群**
本多忠政の嫡男・忠刻と徳川家康の孫・千姫の居館として、千姫の化粧料（⇨江戸期、女子が嫁入りするときの持参金。けわいりょう）10万石で、元和４年（1518）に造営された建造物群。重要文化財14棟が残っている。
地形上の弱点をカバーするよう、過剰なまでの防備設備が設けられ、一方、煙出しや明かりとりのための高窓など、女性の住まいの証しも残る。

**長 局（百間廊下）**
全長121間（約240メートル）の櫓。千姫に仕えた侍女たちが居住した局が並んでいる。

**化粧櫓**
千姫が男山の天満宮を遥拝するときに休憩し、化粧を直したと伝えられる。千姫と侍女たちの人形が飾られている。
床の間があるのは、化粧櫓と本丸の「帯の櫓」だけである。